

【倫理委員会活動報告】

開かれた技術者倫理のありかた：「やさしく伝える」

電気学会倫理委員会

倫理委員会では、「開かれた技術者倫理のありかた」の勉強会として種々の方に講演をして頂いています。本稿では、電気新聞の編集局長、論説主幹を経てフリージャーナリストとしてご活躍されている藤森禮一郎氏に「やさしく伝える」と題し、ご講演（2012/9/11）頂いた内容を紹介します。

1. きっかけとなった事故その1

記者になって忘れられない事故・事件が2つありました。

1つは1974年8月に起きた「原子力船『むつ』の放射線漏れ事故」です。先輩の原子力担当記者が突然入院したことから、急ぎよこの事故の取材をすることになりました。『むつ』の取材は、狭い船内での取材であるため代表取材となりました。代表者が取材した記事を、新聞社は解説記事など一緒に紙面編集しました。第一報は「『むつ』で放射能漏れ」でした。当時は「放射線」の意味や「放射能」と「放射線」の違いも分からず、技術のベースになる原子力理論も専門用語の意味も理解できないまま記事を書き編集したので、大変苦労したことを覚えています。新聞の紙面に載った記事は、現場で取材した記者と違い、専門知識を持たない現場知らずの記者が編集を担当していて、しかも締切りに追われながら仕上げるのですから読者の元に届く新聞紙面の内容は相当ゆがんだものとなってしまいました。

新聞は社会的に大きな影響を及ぼしますから、正確な情報が求められます。しかし、現実にはそうならないことがあります。昨年の福島第一の原発事故の時には、原発に近い病院の院長やスタッフが患者を残し避難したとの誤った報道がありました。情報の送り手が聞きかじり情報だけで記事にしたことに起因するものです。基礎的な専門知識を身に付け、聞きかじり情報ではなく自分の目と足で確認した情報を基に、受け手に分かりやすく伝えることが大切です。どうも一知半解な記事が多いですね。情緒的な報道に流されてしまうのもその辺に原因があるかもしれません。

2. きっかけとなった事故その2

1987年7月に起きた「関東大停電」も忘れられません。停電は首都圏の6都県約280万戸に及ぶ大規模なものでした。今であれば、電気新聞でも一面のトップ記事仕立てになりますが、当時は業界紙の宿命で電力の設備事故は、扱わない慣例になっていました。

当時デスクをしていた私は、業界紙といえども、事故の社会的影響の大きさを考慮して、きちんと取り上げ報道すべきだ、と編集局長を説き伏せ1面の4段記事で扱いました。そして翌週・月曜日の第1面を使い「クーラー大停

電」の見出しで特集を組み、事故の経過と大停電のメカニズムを詳細に報道しました。停電の原因は、猛暑で昼休み後に電力需要が急激に伸びたので、無効電力を抑制するために変電所に設置している電力用コンデンサを投入したものの、無効電力の補償が需要の伸びに追いつけず、基幹系統変電所の母線電圧が低下し、系統の保護継電器が相次いで作動し、停電が拡大していったのです。電力系統事故では典型的なカスケード事故ですが、電力会社の社員でも、系統理論は難しい問題でした。このため、見出しも系統事故とせずに“クーラーの使い過ぎによる大停電”とすることにしました。“大停電のメカニズム”は何回聞いても理解できませんでした。この事故以降、技術ニュースを「やさしく伝える」ことをライフワークにしようと決めました。

3. 解説文を書いて分かったこと

電気新聞の紙上で「技術ニュース」を取り上げた解説シリーズを10年近く手掛けてきましたが、技術的な知識の乏しい電力会社の新入社員を読者としてイメージし、入門書レベルで書くことを心がけました。ところが反応は、新入社員よりも役員や部長など経営幹部社員に好評だったのは意外でした。どうやら役職が上がるにつれ初歩的なことを聞きにくくなるらしい。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」。勇気を持って聞いてほしい。情報を発信する人も分かりやすい言葉や表現を使って発信してほしいと思います。

4. 技術をやさしく伝える

小学校では乾電池を使って豆電球を点けたり、モータを回したり実験を通じて電気のことを教えてくれます。電気には直流と交流があるとか、その違いは何かなど、そのあとは学校では教えてもらった記憶がありません。一般の方に「ネットワークってなんですか」と聞くと、答えは千差万別。自分が知っている、あるいは経験しているネットワークについて答える。また、通信網と電力網は、同じ意味だと理解している人も多い。言葉の理解は、自分が経験して得られた領域でしか理解できないものです。「電力系統」に関しては、「電力系統をやさしく科学する」など何冊か解説書を出版していますが、いまだに難しいテーマです。

5. 電気学会に期待すること

言葉というのは、幅広い知識と豊かな経験を積んだ1人が使うと“重み”も“響き”も違ってきます。学会同士が連携を密にして、技術情報を「やさしく伝える」ことにチャレンジしてほしいと思います。

(まとめ：倫理委員会 喜古俊一郎 (株)日立)